

Homo- sexuality Lecture

同性愛講座

【基礎編】

the volume on
basic class

自己肯定時代

私は、ゲイのライフヒストリー（生活史）の聞き取り調査を行っているが、その中で二十代前半以下の若いゲイたちが語る、自分の性的指向に対する葛藤の少ない（あるいは「ない」）話を聞いていると、多少なりとも悩んできた経験のある三十代半ばの私は、不思議な気持ちにとらわれる。もちろん、そのような年齢でこのような調査に応じることが可能となっている人たちのなかから、もともと早いうちから自己肯定ができている人が対象となっているという偏りがあることは確かだ。

しかし、明らかに、同性が好きであることを意識し始めた頃の彼らの様子について語られる内容には、それ以前の世代とは違う社会的背景が存在している。それは、一つに、彼らがそんな自分に気づき始めた頃に、既にゲイを肯定的に語る本が書店で簡単に手に入る状況にあったということだ。現在二十代前半の人だと、1992年に出版された『別冊宝島 ゲイの贈り物』などの「別冊宝島ゲイ三部作」(『ゲイのおもちや箱』『ゲイの学園天国』、いずれも宝島社)を読み、自分を肯定的にとらえられたという声をよく耳にする。

彼らがちょうど恋愛を意識し始めた思春期は、一般雑誌やテレビなどがゲイを大きくとりあげ、当事者の声も多く一般メディアに登場した「ゲイブーム」と呼ばれる頃に当たり、ゲイ雑誌を手にし始める頃には、ゲイ資本によって出版され、ゲイであることに肯定的

日本のゲイを取り巻く 社会状況

(財)エイズ予防財団リサーチレジデント

砂川秀樹

Hideki Sunagawa

な情報を流していたゲイ雑誌『バディ』（テラ出版）、『G-men』（ジープロジェクト）があった。

また、1990年代の初頭は、いくつものゲイのボランティア団体やサークルの活動が始まった時期でもある。聞き取り調査に応じたくれたある人は、ゲイを中心としたあるボランティア団体に十代で参加した時の経験を語ってくれたが、「昼から集まれる、本名を名乗れる関係が良いなと思った」と話している。当然、彼自身が、「同年代ではまだだけでも」と断わっているように、それがその年代の典型と言えるわけではない。しかし、都市部においてはという限定がつくとはいえ、そのような経験が可能な時代だったということは重要だろう。

そして、さらに、現在二十歳前後のゲイは、『ゲイの世界』へはネットを通じて『デビュー』したという人が多い世代だ。彼らは、早くからインターネット上でゲイに関する情報を手に入れ、それだけでなく、自らサイトを立ち上げ、その中でゲイであることを十代の頃から公表してきたという人が珍しくない世代である。彼らの多くが、それ以前のゲイに比べてさらに容易に自分の性的指向を受け入れられることが可能となっていることは言うまでもないだろう。

社会的変化

ゲイにとつて肯定的な社会状況への変化は、より公的な面においても実現しつつある。代表的なものに、同性愛者が人権施策の対象

として記された、2000年に出された「東京都人権施策推進指針」がある。最初の案の段階で人権が守られるべき対象として記載されていた同性愛者が、一旦削除されたものの、「NPO法人アカー」などの組織的働きかけや、多くの人たちがメールなどを通じて送ったパブリックコメントの圧力の結果、最終的に含まれることになった。また、法務大臣の諮問機関である「人権擁護推進審議会」の最終答申の中で、やはり同性愛者が人権擁護の対象として記されている。

教育の場でも、同性愛を肯定的にとらえようとする意識と実践が、少しずつだが広がっている。「人間と性」教育研究協議会」は、同性愛をはじめとする性的少数者についての理解を性教育の中に積極的に取り込んでおり、その中に「LGBTユースサポートセンター」という組織も設立されている（LGBTはレズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー／トランスセクシュアルの頭文字）。同研究所が著した『同性愛・多様なセクシュアリティ』（子どもの未来社）では、実際の性教育の現場でどのように同性愛というテーマを取り扱ったらよいか、授業の実践例を含めて具体的に提案されている。また、2002年には、厚生労働省所管の財団が発行した中学生向けの性教育用の冊子『思春期のためのラブ&ボディBOOK』のQ&Aにも同性愛についての質問が掲載され、同性愛を否定しない（肯定的と言いつつ切らない）内容で回答が書かれた（しかし、この冊子は、ビルの扱いなどをめぐって保守派の国会議員等がクレームをつけ、回収されている）。

これらの動きは、同性愛が単なる「趣味嗜好」の問題ではないと

いう認識がだんだんに広がってきていると、示していると言えるだろう。

抑圧的な側面

このように語ると、ゲイを取り巻く社会環境からは既に多くの問題が取り除かれている、あるいは取り除かれつつあるように聞こえるかもしれない。しかし、残念ながら、必ずしもそうとは言えない。

まず、インターネットや書籍などを通じてゲイに肯定的な情報にすぐにアクセスできるはずの若いゲイの間でも、自分の性的指向に悩む子は少なくない、いや今もそのような子の方がずっと多いことだろう。最初に述べた「自己肯定が比較的容易に行えたゲイの若者」でさえ、必ずと言っていいほど「初めて同性を好きになった時、それを言っちゃいけないと思った」と語っている。このような意識は、これまでごく当たり前のこととして特筆されることすらなかったが、実は重要なことであるように思う。何歳でそのことに気づいたとしても、ほとんどの人が「言っちゃいけないと思った」という印象を残しているという事は、同性を好きであるということが周りの人には否定的にとらえられるということを知らず知らずのうちに刷り込まれているということを示しているからだ。決して社会が、同性愛に対して寛容になったとは言えないのだ。

例えば、自分がゲイであるということに悩んでいないというゲイでも、そのことを自分の肉親に話しているという人は少ない。また、大

学生であるうちは親しい友人に自分がゲイであることを比較的容易に語っていた人でも、就職すると、職場ではまわりの話にあわせて異性愛者のふりをしているという人がほとんどだ。それでも、自己肯定感が強い人ならば、そのような状況を比較的容易に「やりすこす」ことができるだろう（逆にその内面と実態のギャップが大きな葛藤になる可能性もある）。しかし、そうではない人にとつては、強い抑圧感を感じられ、さらなる自己否定感につながるに違いない。また地方に住むゲイからは、今も決して楽ではない状況がよく聞かれる。比較的ゲイとし



写真 / 沢辺均

て楽に生きることが可能になりつつあるとはいえ、それは一定の条件の下に実現されるもので、まだまだ社会全体としては抑圧的な面も大きいと言えるだろう。

NHKが1999年に全国3600人の男女(16〜69歳)に行なった調査での、同性同士がセックスすることについて「よくない」「どちらかといえばよくない」を回答した人は全体の65%という結果は、そのような否定的な現状を表している(NHK「日本人の性」プロジェクト編 2002、「データブック NHK日本人の性行動・性意識」日本放送出版協会)。また、2002年に、ラップグループ「キングギドラ」が、ゲイなどに対する極めて攻撃的な差別表現を使った歌を出し、抗議を受けてそのCDが回収されるという騒ぎもあつた。さらに言うならば、ハッテン場となつている公園でゲイをターゲットとした若者の暴力事件も起こつていること、その結果殺害された人もいるという事実も忘れてはならない。

今後の課題

だが、しかし、そのような抑圧的側面がまだまだ残る社会の中でも、ゲイたちは、「コミュニティ意識を高め、様々な方法で自らの生活を楽しむ方法を発達させている。これまでもあつた性的な楽しみを充実させる」「ハッテン場」や、仲間とのコミュニケーションを楽しむパーティークラブでの交流だけでなく、共通の趣味に基づくサークル活動も活発になつている。現在、ゲイのサークル活動を網羅することはほとんど

不可能だが、吹奏楽や合唱、ダンスといった音楽系のもの、バレーボール、テニス、野球、バスケットボールといったスポーツ系のもの、他、ハイキングや英会話など多種多様なサークルが存在し、聴覚障害者のグループもある。また、音楽活動を行う個人やバンドも増えており、独自の音楽イベントも盛んだ。また、HIV/AIDSに関連するプロジェクトやバレードなどのイベントにスタッフとして積極的に参加する人たちも増えている。

このように、一定の条件下とはいえ、ゲイが自己実現できる場は確実に広がりがつつあることは確かだ。しかし、ある意味「だからこそ」、今後ゲイにとって大きな課題となつてくる事もあるだろう。それは、**人生の後半をめぐる問題だ。**ゲイであっても異性と結婚し子どもをもうけるという人生がある意味当然だった時代が過ぎ、ゲイとして生涯を送る人が増えている現在、老後の問題、同性とのパートナーシップの法的、制度的保護の問題などが浮上してくることは必須である。また、ゲイであることをオープンにする人が増えていくことにより、これまで生じなかつた様々な摩擦が、職場などで生じる可能性もある。さらに、それらとは全く異なる文脈にあるが、**ゲイの間でのHIV感染拡大の深刻さ**も見逃すことはできない。

これらの問題を解決していこうとするなら、単に個人的な取り組みだけでは限界があることは明らかだ。これから先、これらの問題にどれだけのゲイがどのように主体的にかかわることができるのか、そこに、さらなるゲイ生活の充実がかかっていることは言うまでもない。

異性しか好きになれないか、同性しか好きになれないか、などといった性的指向は、本人の自由意思によって選択できるものではなく、それらの違いによって差別することは道義的に許されることではない。そのような意識の広まりから、欧米を中心とした世界各地で、同性愛者にも異性愛者と同等の法的権利を与えていこうとする動きが徐々に生まれている。法的な部分だけでなく、若い世代のゲイやその家族らに対するメンタル・ヘルスの分野も整備され始め、最近では宗教的にも同性愛者らを積極的に受け入れていこうとする流れが顕著になっている。長年にわたって「同性愛は罪」としてきたローマ・カトリック教会も、今では「先天性のゲイ」という概念を認め、同性に性的な意識が向くことを罪としない方針へ転換している。

ヨーロッパ

現在、同性愛者の権利がもつとも厚く認められている地域はヨーロッパ。1989年にデンマークで世界で初めて、同性カップルにも異性愛の夫婦に準じた法的権利を認める制度が導入されたのを皮切りに、ノルウェー（1993年）、スウェーデン（1995年）、アイスランド（1996年）、オランダ（1998年）、フランス（1999年）、ドイツ（2000年）、ポルトガル（2001年）、ベルギー（2002年）などで、次々に同様の法律が成立した。

オランダでは、婚姻に関わるすべての法律から、女性と男性を区別するような記述をすべて削除した新しい婚姻制度を2001年4月か

ゲームブメントと世界の潮流

MILK編集部代表

角屋 学

Manabu Kadoya

ら開始。海外から養子を引き取ることができないといった、いくつかの例外を除いて、同性カップルと異性カップルとの差別を完全になくし、世界で最初に「同性結婚」を認めた国となった。

スイスでは2002年12月、チューリッヒとジュネーブに限って導入していた同性カップルの権利を保護する法を全国に拡大する法案を提出し、早ければ2003年中に施行される見通し。メツラー法務大臣は、「開かれたスイスに向けた第一歩。路上で、ゲイやレズビアンのカップルが抱き合ったりする光景が普通になるだろう」とコメントした。

1980年代のサッチャー政権時代まで、同性愛者に対する差別的な政策が公然と行われていたイギリスでも、今では情勢は一変している。ブレア政権以降、同性愛者を強制除隊させる軍の規律が廃止され、「公的な教育現場で同性愛を助長してはならない」という法律（セクシオン28）も撤廃された。アバリストウイス市では、レズビアンを公言するジャッキー・テイラー氏が市長に新任され、2002年には保守党の有力政治家アラン・ダンカン議員が、「タブーは崩れた」という言葉とともに、ゲイであることをカミングアウト。2002年の世論調査では、同性愛に抵抗を感じていないと回答した人が調査開始以来、初めて過半数を突破した。イギリスで同性カップルの権利を保護する法が成立する日も、そう遠くはないはずだ。

ヨーロッパでこれほど同性愛者の人権が認められている理由は、ヨーロッパが世界的にもっとも過酷な同性愛者への迫害を行った歴史

を持つからに他ならない。とくに、近代ゲイ解放運動の中心地であったドイツでは、1871年のドイツ帝国成立以降、同性愛は刑法第175条で犯罪行為として厳しく処罰され、第2次大戦中には、ヒトラー率いるナチスによって、同性愛者はユダヤ人らと同様に大量虐殺された。

19世紀後半、運動の中心にいたのは医師のマグヌス・ヒルシュフェルトだった。彼は1897年に科学的人道主義委員会を設立し、同性愛は自然な人間の性愛であることを一貫して主張していた。20世紀に入ると、ヒルシュフェルトの講演に多くの人々が集まるようになり、刑法第175条の廃止運動には、アルバート・アインシュタインやレフ・トルストイなどの著名人が賛同しはじめた。これに対してナチスは、「同性愛は不自然で、有害な存在。社会的な伝染病であり、非ドイツ的なもの」として、国民へ向けて悪しきプロパガンダを繰り返した。1923年には、ウィーンで開かれていた同性愛者を支援する会を襲撃し、ヒルシュフェルトの研究所にあつた一万冊に及ぶ本もひとつ残らず焼き払われた。同性愛を、同志愛の延長線上にあるものと考えていたナチスは、帝国の統一性を維持するために、同性愛者間の連帯感が増していくことは大いなる脅威と感じていたのである。

それから時は流れ、2000年11月10日、ドイツ連邦議会は同性愛者のカップルにも男女の夫婦と同様の法的権利を認める法案を賛成多数で可決。ボルカー・ベック議員は、「わが国の同性愛者にとつ

て記念すべき日。今日から同性愛者は差別や偏見を持つて見られることはないのです」と語った。この日の議会には多くの同性愛者たちが訪れ、先人達の苦難や悲しみをかみ締めながら、法案の通過を見守っていた。

現在は同性カップルの権利を保護する法を導入していないイタリヤやギリシアなどでも、近い将来、これらの動きに歩調を合わせざるを得なくなるだろう。というのも、EUでは加盟しているすべての国に対して、同性愛の差別につながる法律を廃止し、同性結婚を認めるよう指導しているためで、少なくともすべての加盟国は2003年までに、偏見を禁止する法案にゲイとレズビアンを含めなくてはならないことが決まっている。エストニアやラトビア、ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアなど、EUへの加盟を希望している国も、当然ながらこれらの条件を受け入れていかなければならないことになる。

カナダ・アメリカ

ヨーロッパ並みに、セクシアルマイノリティに対する理解が進んでいる国といえばカナダである。カナダでは、小学校の段階で異性愛者のほかにセクシアルマイノリティの存在を教育していることから、性的指向による差別や偏見は、都市や地方に関係なく少ないのが特徴的。同性同士の結婚を認めているキリスト教の会派も多い。

F O T F (Focus On The Family) という保守的な宗教団体が2002

年に行った世論調査によると、同性カップルにも結婚する権利が許されるべきであると考える人が46%（40歳以下では60%）で、反対している人（44%）を上回るという結果が出ている。

しかしながら、カナダでは同性結婚という形で認めている州は存在していないため、2組の同性カップルが2001年、「婚姻を法的に認めないのは、カナダの権利と自由の憲章に違反する」として、オンタリオ州を相手取って訴訟を起こした。これは最高裁まで争われ、裁判所は2002年7月、同州政府に対して同性カップルの結婚届を受理し、必要な法的環境を2年以内に整えることを命じる判決を下した。回国では現在、ブリティッシュ・コロンビア州やケベック州などでも同様の訴訟が起こされているが、これらの司法判断にも大きな注目が集まっている。

アメリカのゲイ・リベレーションの歴史は1969年6月28日、ニューヨーク市のグリニッチ・ヴィレッジ、クリストファー・ストリート57番地にあったゲイバー「ストーンウォール・イン」から始まった。事件のきっかけは6月27日金曜日の夜。ゲイのファンを大切に、ゲイからも愛されていた女優ジュディ・ガーランドの葬儀が行われたこの日、バーには彼女を弔うために200人近くのゲイやレズビアンらが集まっていた。そこに、酒類の無許可販売をしていると通報を受けたニューヨーク市警が、捜査礼状を手に乗り込んできたのだ。当時、ゲイバーが摘発を受けるとするのは日常的なことであり、この日もいつものように、店内の従業員はおとなく逮捕され、警察



写真／モリエイキ

の食い物にされるはずだった。

職務質問を受けて釈放された客はいったん店の外に逃げ帰ったものの、その後がいつもと違っていた。客たちは再結集して、従業員をパトカーに連行しようとする警官を襲撃した。勢いづいた客たちはそのまま暴動化し、町の窓ガラスや道路の公共物を破壊・損傷させ、社会に対する不満を体で表現したのだ。騒ぎは夜明けまで続き、最終的に群集は2000人以上に達していたという。警官も400人が応援に駆けつけ、多数の負傷者を出した。史上初のゲイによる反乱は、その後も3日間ほど続いた。

ストーンウォール以前も、ロサンゼルスなどでゲイ・パレードは行われていたが、この事件が象徴的なものとして人々の胸に刻まれていくのは、それが事前に計画されたものではないにもかかわらず、多くのゲイやレズビアンたちが権力に立ち向かうために集まった出来事であったためだ。これをきっかけに、セクシュアルマイノリティらによる活動が全米各地で組織化され、社会的認知を求める第一歩が踏み出せたのである。

現在アメリカでは、ハワイ州やアラスカ州など、同性結婚を禁止する法律を作っているところも多く、同性愛者の権利が守られていない国家という印象を受けるかもしれないが、必ずしもそうではない。カリフォルニア州などの州では、異性愛の夫婦と同等の一部の権利が認められているところもあるし、市レベルで同性カップルの制度的に保護しているケースもある。ヘイトクライム法や反差別法により、

セクシユアルマイノリティへ何らかの保護を与えている法律は、ほとんどの州に設けられている。

2002年に大学生を対象にして行われた世論調査では、過半数を超える58%が同性結婚に賛成すると答えている。また、レズビアンやゲイなどのパートナーにも医療保険を給付する企業数は、9・11テロ事件以降の低迷する経済情勢の中で、史上最高値に達している。「フォーチュン」紙で50位内にランキングされている企業のうち、自動車ビッグスリーを含む28の企業が、同制度を導入済みであることも注目してほしい。「同性愛者の労働者」という概念すらない日本とは、まさに大違いなのだ。

アメリカで唯一、同性婚が認められているのはバーモント州。世界で初めて黒人奴隷解放を行ったリベラルな州として知られ、州の住民もそのことに誇りを持っている地区だが、法案成立までの道のりは決して容易いものではなかった。

闘いは1998年11月、2組のレズビアン、1組のゲイカップルの第一声から始まった。彼らは、普通に生活をして、税金を支払うスタイルは、同性愛者も異性愛者も変わらないと主張し、医療保険の受給や入院中の面会、不動産の譲渡など、男女の夫婦なら受けられるはずの大小1300にのぼる便益が奪われたとして州を提訴した。しかし、バイセクシユアルも一夫多妻制も認めることになるとして、州の反対派は強く反発。この争いはおよそ1年間にわたって行われ、同州最高裁は1999年12月20日、次のような司法判断を5

人の裁判官全員一致で示した。

「州は憲法上、バーモント法下の婚姻から生じる共通の恩恵と保護を、同性カップルに施さなければならぬ。同性愛者のカップルも、異性間のカップルが婚姻した場合とまったく同じ権利が与えられなければならない」

州はその後、税制、相続、養育権、育児休暇、税の控除など、婚姻関係にまつわる300以上の社会的利益・権利を、同性愛のカップルにも認めることを決定した。

民主党クリントン政権時代に進められていた同性愛者に対するリベラルな政策は、2000年の大統領選挙で共和党ブッシュ政権に移行したことで、足踏み状態に陥っている。同性愛者に比較的寛容な民主党と、そうではない共和党という図式が定着しているが、これは理念の違いというよりは、政治献金の額の差と言った方がより正しいかもしれない。

アメリカ最大規模のセクシユアルマイノリティによる政治的人権保護組織HRC (Human Rights Campaign) は、年間100万ドル(約1億2000万円)以上を政治活動委員会(PAC)を通じて、各政党の連邦政府立候補者へ献金を行っている。クリントン政権時代にはその9割以上、人数にして1000人を超える民主党立候補者に渡っていた。2002年では民主党に83%、共和党に17%と、格差は若干縮まっているが、まだその差は大きく、今後もこの傾向は変わらないだろう。

その他の地域

同性カップルの権利や保護が国家、あるいは、一部の州や市レベルで認められている国はこのほかに、アルゼンチン（ブエノスアイレス）、オーストラリア（ビクトリア州・ニューサウスウェールズ州）、ニュージーランド、リヒテンシュタインなどが挙げられる。この数は、今後とも間違いなく増え続けていくだろう。アジアでは同性愛者の存在感自体が希薄だが、韓国や台湾、エジプトなどで、同性愛者の人権問題について議論される機会が増え始めていて、それらのベクトルは、例外なくリベラルな方向へ向かっている。

ほんの数年前までは、同性愛者が「一人もいない」ことになっていた韓国でも、人気男性タレントのカミングアウトや性転換した女優の活躍などで、セクシュアルマイノリティに対する国民の理解は急速に深まりつつある。2002年には、男性から女性への性転換手術をした女性が、戸籍上の性別訂正と改名を求めた訴訟で、全面的に受け入れる司法判断が出されている。この際に裁判官は、「人間の尊厳と価値、幸福を追求する権利など憲法理念に照らすと、申請を受け入れるべき」と説明している。

おそらく今後100年間で、世界の9割近くの国で同性結婚（あるいはDP「ドメスティックパートナー」法）が認められるようになっていくだろう。同性愛は異常だなんて言う人はいなくなっているかもしれない。現在わたしたちが、「昔は黒人が白人のレストランに入ることが

許されていなかった」と話しをするように、100年後には、「昔は同性愛者が異性愛者と同じように結婚することは許されていなかった」と話しをされていて、わたしたちを憐れんでいてくれているに違いない。

同性愛者の権利が認められていない国に住むゲイにとって、最大の関心事とは自分の国でいつ「闘い」が始まってくれるかということ。はじまりの鐘を鳴らすのは、あなた以外の人間かもしれないけれど、もしも誰かが闘いを始めた時は、ためらうことなく共に闘ってほしい。あの日の彼らや彼女たちみたいに。

補足 ● 「同性愛者にも異性愛者と同等の市民権を与える」という世界の潮流は、順調に広まっている。2005年にはスペインやカナダで同性結婚、イギリスでDPパートナーシップ制が認められた。南アフリカ共和国やアメリカの一部の州でも、同性婚を認めようとする動きが出ている。

日本では2003年に性同一性障害の上川あやさんが東京・世田谷区議選へ出馬し、高い得票率で当選を果たすという画期的な動きが見られた。その後、「性同一性障害者特例法」が全会一致で可決され、戸籍の性別変更も可能になっている。社民党のマニフェストに同性愛者に対する差別撤廃が盛り込まれたり、宮崎県都市で同性愛者らの人権擁護条例が制定されるなど、セクシュアルマイノリティにやさしい社会づくりが、様々な形で進められている。

人が同性愛になるのはなぜだろう。この問いに対しては、同性愛には原因と本質があるという立場（生物学的本質主義）と、同性愛概念は社会的に作り出されたものであって、同性愛者という概念は虚構だという立場（社会構築主義）がある。

本質とは、同性愛者には共通で、同性愛者以外とは共有しない特性のことである。科学的に研究するということは、この「本質」を探そうとする試みだから、代表的な「本質主義」である。ただし、生物学は「生得的か、後天的か」の議論をする時、科学は「生得的な」特徴しか捉えることができないという先入観を持つ人が多いようである。後で脳と遺伝についてみるが、必ずしもそうではないことは覚えておいてほしい。

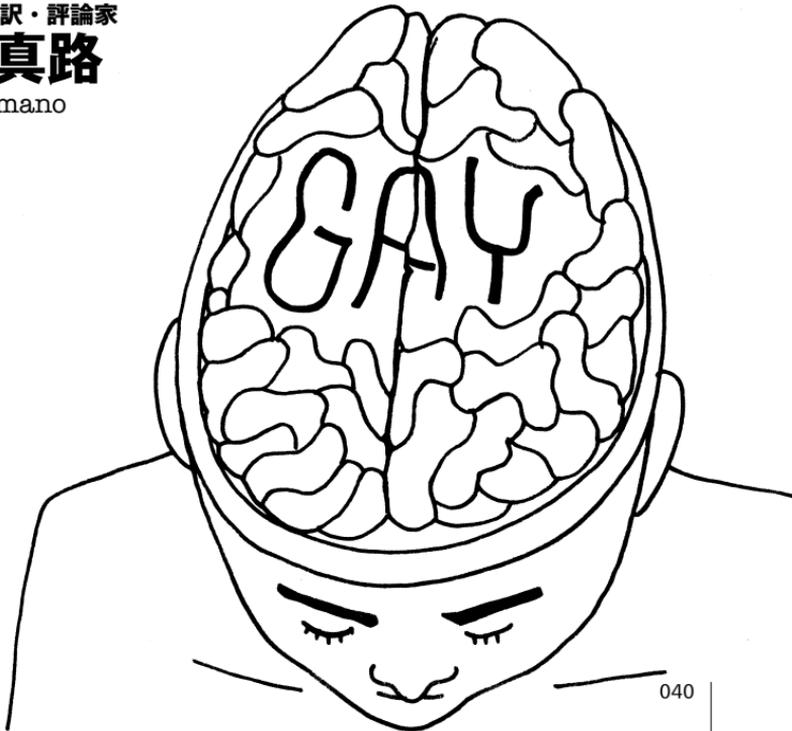
一方で、社会構築主義は、そもそも「同性愛」という概念自体、19世紀末にハンガリーの作家カール・マリア・ケルトベニーによって作られたものであり、それが広がるにつれて社会的に作りだされたものであるため、「同性愛」概念に本質などないという。つまり、「同性愛者」というカテゴリーそのものや、そのカテゴリーに属するとい

同性愛の「原因」とは？

科学技術翻訳・評論家

玉野真路

Shinji Tamano



う感覚——同性愛者アイデンティティ——は虚構だというのである。「同性愛」のどういった側面を取り上げるかによって、この二つの立場の力点は変わってくるだろう。最近の同性愛の科学研究を通してそのことを考えてみよう。

脳

1991年、アメリカの有名な科学雑誌『Science』に一本の論文が掲載された。大脳解剖学者サイモン・ルベイが、エイズで死んだ男性同性愛者の脳を調べてみたところ、異性愛者の脳と違いが発見されたというのである。この研究でルベイは、男女の間で違いが発見されていた、大脳の視床下部というところにある神経の束ZINCINに注目した。この部分は、統計をとると男性より女性の方が小さい(統計学では、明かに違いがあるということを「有意」というので、これ以後この用語を使う)。このように男女で違いがある脳細胞の束のことを性的二型核(SDN)という。ルベイが男性同性愛者の脳を調べてみたところ、そのZINCINは女性側に統計的に有意に偏っていた。

この発見は、セクシュアリティの現代的な科学研究のはじまりであった。それと同時に、ルベイはさまざまな数の批判にさらされることにもなっていく。多くの批判は、先述の社会構築主義陣営からの反応であった。ルベイは自著『クイア・サイエンス』(和訳、勁草書房2002)で、「実際のところ、『強硬な』社会構築主義者のアプローチと生物科学のアプローチとの間にはほとんど共通点がないので、こ

れら二者の対話はほとんど不可能である」と苦々しく述べている(『クイア・サイエンス』和訳、勁草書房、2002)。しかし、中には科学的に有効な論点も含まれていた。たとえば、ルベイが調査した男性同性愛者がすべてエイズ患者であったため、問題のZINCINはエイズウイルスあるいはその治療薬の影響で小さくなったのではないか、というものだ。ルベイも、もちろんその可能性は考えていた。そこで、ルベイは三種類の対照実験を行なっている。まず、エイズで死んだ異性愛者の脳と比べてみた結果、ゲイの方がZINCINは小さかった。次に、肺ガンで死んだゲイを比較してみたところ、やはり異性愛者よりその部分が小さかった。最後に、ZINCINがある視床下部の別の細胞群を検討して、ゲイとストレートで差がないことを確認した。検査したサンプル数が少ないため科学的に確定したとも言えないが、これらの実験から結果の精度は高まった。

しかし、コロンビア大学のウィリアム・バインなど依然としてルベイの結果に不満を持つものもある。それは確かに、対象実験のサンプル数が小さいなどルベイの研究にある科学的限界を鑑みてもうなずける。バインが続けているというZINCINの構造の研究結果を待ちたい。

もしこの差が本当にあるとしても、それは生得的であるとは限らない。この結果は成人だけについて行われたもので、たとえば男性とのセックスを想像したり、実際に行ったりした場合に後天的に形成される可能性も否定できないからである。つまりこの差は同性愛の

原因なのか、結果なのか分からない。

2002年になって、ヒツジの同性愛行動の研究者であるオレゴン健康科学大学のK・ラーキンらが、同性愛行動をするヒツジの性的二型核(SDN)を調べてみたところ、人間のMAH3と同様の結果が得られたとアメリカ神経科学会で発表した。

ヒツジの同性愛行動は、アイダホの農場で発見されてからよく知られている。また、オス同士同性愛行動は、ハヌマン・ラングール、ポノボ、マナティなどさまざまな種で知られている。ヒトの同性愛行動と動物の同性愛行動にどの程度の並行性があるのかは不明であるが、MAH3など性的二型のある部分の多くが最初 UCLA のロジャー・ゴルスキーらによってマウスで発見され、その後ゴルスキーの研究室のローラ・アレンドラによってヒトでも解剖学的に保存されていることが明らかにされてきたことを思えば、ヒツジの結果が人間と同様の意味を持つことも十分に考えられる。したがって、未だ決定ではないものの、今回のヒツジの発見はルベイの発見を側面から補強する結果といえるだろう。詳しい論文が発表されるのが待たれる。

遺伝子

同性愛に遺伝が関与している可能性は、双子の研究で最初に示唆された。科学史上いくつかの双子の研究があるので、代表的なものを順を追ってみてみよう。

1980年代に入ってポストン大学医学センターの精神科医リ

チャード・ピラルド、ノースウェスタン大学のマイケル・ベイリーらが一連の一卵性双生児の研究を行なった。片方がゲイである場合、もう片方がゲイあるいはバイセクシュアルである確率は、1991年の研究で52%、1995年の研究では20%と二卵性双生児や通常の兄弟と比べて出現率が有意に高くなっている。また、2000年にケネス・ケンドラーらが行なった研究によると、一卵性双生児でのセクシュアリティの一致率は31・6%となっていて、これも二卵性双生児や通常の兄弟より有意に高い値だった。しかし、ベイリーらがオーストラリアで行なった研究では、支持するにも否定するにも十分な結果は得られていない。

こうした研究を総括すると、どうも遺伝の影響はありそうだが、はつきりしない、ということになる。ほとんどの研究ではゲイの一卵性双生児の兄弟はゲイかバイセクシュアルであることが多い。このことはゲイの遺伝を直接しめすわけではない。たとえば、一卵性双生児は通常の兄弟より顔立ちが似ているため、親がよく似た育て方をする。そのため、性的指向が一致するなどの可能性もあるからである。しかし、逆にこうした一致が存在しなければ、遺伝的な要素を考えると自体が難しくなる。また、一卵性双生児は兄弟でまったく同じ遺伝子を持っているため、同性愛が生得的なものだけで決定しているとするときセクシュアリティが完全に一致するはずであるが、そうはなっていない。したがって、生得的、遺伝的な要素以外にも、後天的な要素が関与しているはずである。

こうした双生児の研究に触発されて、1994年に米国立ガン研究所(NIC)のデーン・ヘイマーが家系分析を行ない、アメリカの科学雑誌『Science』に発表した。この研究によると、ゲイになりやすさを決める遺伝子がX染色体の端(Xq28)にあるという結果になった。ヘイマーは1995年にも同様の研究を行ない、自分たちの結果を再現している。

この研究もまた、その後さまざまな批判にさらされていく。代表的なものは、1999年に『Science』に掲載されたライスとエバーズの論文である。彼らはカナダのゲイ雑誌で被験者を集めて、ヘイマーが行なったのと同様の研究を行なった。しかし、彼らはX染色体に遺伝子がありそうだという結果を得ることはできなかった。ヘイマーは、ライスらの研究は、自分たちの研究と違い、母方から遺伝する例だけを集めていないのがよくないと考え、『Science』に反論の記事を載せている。いずれにしろ、結果を確定するには、まだこれから精緻な研究が必要な分野である。

同性愛者に対して科学がどれくらい

同性愛者は、自分と同性に性的関心を持つ。一方、異性愛者は自分とは異なる性に性的関心を持つ。これが同性愛者と異性愛者を区別する基準である。これを調査するのは簡単で、本人に聞いてみればいい。もちろん、この二つの中間領域には、両性に性的関心を持つバイセクシユアルや、だれにも性的関心を持たないAセクシユアルと

いう存在もある。だが、とりあえず科学は典型的なものを研究する。同性愛者と異性愛者の脳を比べ、同性愛者と異性愛者の遺伝子を比べる。そこに確固たる差が見出せば、さらに他のセクシユアリテイの研究につながるだろう。そうした違いが分かれば、セクシユアリテイの分化の機構や原因追求の研究にもつながるだろう。

現在のところ、脳の研究にしろ、遺伝子の研究にしろ、どうやら違いがありそうだが、確定的で十分な証拠が得られていない、という段階である。したがって、同性愛の原因は生得的な遺伝の影響はありそうだが、後天的・社会的なものも関わっているだろう、というあいまいなものにならざるをえない。今後の研究の進展を待ちたい。

同性愛はかつて病氣と認識されていて、間違った科学的な推測にもとづいてホルモン療法、精神分析、嫌悪療法などの、さまざまな〈治療〉などするはずもない〈治療法〉の犠牲になってきた。その意識が現在でも残っている。そのため、同性愛を科学することは同性愛者を抑圧することだと考えられているようである。

だが科学が探求できるのは、同性愛者というカテゴリーやアイデンティティという社会的な要素が大きく関与する部分ではなく、それを下から支える感情のレベルのことなのである。それが〈治療〉や差別の正当化に悪用されないよう監視が必要であろうが、科学自体が悪ではない。むしろ、わたしたちがどこからきて、どこへいこうとしているのかを考える最良の材料を提供してくれている。

「ゲイ・コミュニティの誕生」

2000年8月27日、「東京レズビアン&ゲイ・パレード2000」が開催され、東京での大規模なパレードとしては4年ぶりに「復活」を遂げ、実数にして2000人が参加するという過去最大のパレードとなった。そして、それにあわせる形で、新宿二丁目では、ゲイバーのマスターらが中心となって計画し運営した祭りである「東京レインボー祭り」が開催され、通りは身動きできないほどの人で埋め尽くされた。その祭りの最後に打ち上げられた花火を見て、ゲイバーが数多く集まっている新宿二丁目という場に様々な思いを持つゲイたちは涙を流した。

1990年代の初めから、ゲイ評論家として一般メディアで積極的に発言してきた伏見憲明は、その日の出来事をゲイ雑誌『バディ』（テラ出版）の中で感動を込めてこう表現している。「ゲイ・コミュニティの誕生」と。

ここ数年、「何を『コミュニティ』と言うかは難しいけれど」といった言葉が付け足されながらも、「ゲイ・コミュニティ」という言葉がゲイの間で使われることが多くなった。

時にその言葉は、200軒以上のゲイバーが集中している新宿二丁目という街を指すこともあれば、何らかのボランティアやサークルの活動に参加している人たちのネットワークや様々なきつかけでできたゲイの友人関係の輪を意味することもあり、また、一つひとつのゲ

日本のゲイの歴史

(財)エイズ予防財団リサーチレジデント

砂川秀樹

Hideki Sunagawa

イパーをそう呼ぶ人もいる。

ここで、それらが「本当に」コミュニティと呼べるものか、どういふものを「ゲイ・コミュニティ」と呼ぶべきかと議論することはあまり意味がないだろう。重要なのは、現在、ゲイの中で、そのように「コミュニティ」という言葉で指し示したくなる「何か」が、ゲイ集団の関係性の中に見つけられつつあるということ、作られつつあるということ、あるいは、コミュニティという言葉への意識が高まっているということだ。

この「ゲイ・コミュニティ」という言葉が使われるようになった背景には、日本のゲイの意識の変化があることはいままでもない。この章には、「日本のゲイの歴史」というタイトルが与えられているが、ここでは、「コミュニティ」という意識が高揚してくる背景を描くことで、茫漠たる「日本のゲイの歴史」の一筋の流れを追いたいと思う。しかし、そのように限定したとしても、日本のゲイ（あるいはゲイと呼ばれる以前の、同性と性行為を持っていた男性たち）に関する歴史を書くことは極めて難しい。それは、一つにゲイの声が長らく書き残されてこなかったことによる。だが、まさに当事者の声の不在から、声の流通・発信に至る変化こそが、ゲイの一つの歴史であり、「ゲイ・コミュニティ」意識の形成と強く関係しているのである。

声の不在という歴史

抑圧や差別を受けていた人たちが往々にしてそうであったように、

これまで長い間、ゲイ自身が自らの言葉や生活史を書き残すことはなく、まして、その歴史が編まれることは皆無だった。日本では、「男色」「衆道」という言葉で語られる江戸時代までの男性同性間の性行為やそれを基にした関係が様々な文献や文学作品上に書かれており、それらについての歴史的な考察も少なからず行われてきた。

しかし、その時代においては、そのような行為を行うことが個人の属性となることがなかったため、当時の記録を「ゲイ」あるいは「男性同性愛者」の歴史として読むことはできない。だが、いずれにせよ、同性間での性行為を行うことが個人の属性となり、日本においてもそのような属性を自分にあてはめるようになった同性愛者が「誕生した」と言われる。明治・大正期以降も、ほとんど当事者の声を書き残されてこなかったということに変わりはない。

その時代において書き残されてきたものは、1900年代初期の性科学における「変態性欲」の一種としての「同性愛」についての分析や解説であり、第二次世界大戦前後の「男娼」についての記事やルポであった。それは、常にそれらに「ついて」書かれたものであり、当事者の声そのものではなかった。そのような当事者の声の不在の歴史が変わり始める一つのきっかけは、1950年に発刊の始まった『あまとりあ』(あまとりあ社)などの性をテーマとした雑誌の登場だ。『あまとりあ』においても、当初、同性愛は「逸脱」や「変態」として一方的に語られる存在でしかなかったが、次第に同性愛者の悩みが掲載されるようになり、そして、男性同性愛者の座談会などが開か

れるようになっていた。「あまとりあ」の発刊開始の二年後に男性同性愛者の同人誌『アドニス』(アドニス会)が発行され始めているのも、そのような当事者が語り始めた流れにあると考えていいだろう。

そして、さらにそのような状況を大きく変化させたのは、1971年のゲイ向け商業誌『薔薇族』(第二書房)の発行、それに引き続き他商業誌の登場である。

経験の共有へ

一般書店でも手に入るそれらのゲイ雑誌を通じてゲイ・ネットワークが一気に拡大しただけでなく、誌面に多くのゲイの自らの声を書き込まれていくことで、ゲイが広く経験を共有することができるようになった。また、ゲイバーの広告が掲載されることにより、それまで主に口コミで知られていたゲイバーの存在が周知されるようになり、その客層を拡大する結果にもなった。雑誌に書き込まれた声を通じての経験の共有、バーの利用者層の拡大と雑誌の文通欄によるゲイ同士が知り合う機会の増大が、ゲイの関係性のあり方と意識に大きな変化をもたらしていったことは間違いない。その直接的、間接的な影響の下、1970年代後半にいくつもの小さなゲイリブ団体が誕生し、ミニコミ誌が発行されている。また、いち早くゲイリブについて発言を始めた大塚隆史が、1978年に人気ラジオ番組のパーソナリティとなったことは、ゲイの声が多くの人々の耳に届く画期的な出来事だった。

だが、そのような自己解放的な視点を持つ動きは、決してゲイの世界の中で中心的なものではなかった。当時のゲイバーは今よりもはるかに、性的な関係を持つ相手を探すことに重きがあり、現在でいうところの「コミュニケーション」感が得られる関係性は少なかったという。そのような時代のせいだろう、1970年代に誕生した様々な団体やミニコミ誌はそう長くは続かなかった。

声の発信

1980年代、ゲイに(そして「世界中の全ての人に」)大きな影響を与える出来事が起こる。エイズの登場である。この病気の登場により、これまで基本的にゲイや同性愛について書き記すことになかった大新聞までもが、米国のゲイの姿や生活などを掲載するようになるという思わぬ結果をもたらした。そして、その後、日本でもHIV感染者が増えるにつれ、日本のゲイへと関心が向いていく。

ちょうどその頃、いくつかのゲイリブ団体が登場している。その中でも、「ILGA (International Lesbian and Gay Association) 日本」(1984年設立)や「動くゲイとレズビアン会(テカー)」(1986年設立)は、いち早くエイズとゲイを結びつける動きに反発し、エイズ予防法に対する反対運動などを展開することで一般メディアにその名を登場させることになった。それは、本格的に当事者の声が、一般メディアを通して外へ向かって投げかけられる始まりとなった。

そして、1990年代初頭、さらにゲイは「一般社会」に向けて

強く自らの存在を主張し始めた。1991年、アカーは、東京都を相手どり「府中青年の家事件」の裁判を始めた。これは、府中青年の家を利用した際に同団体が他の利用団体からいやがらせを受け、そのことをめぐって施設側と交渉した結果、それ以降の宿泊利用を拒否されたことをめぐる裁判である（1997年にアカー側の勝訴が確定）。

また同じ年に、伏見憲明が、ゲイ・スタディーズの先駆けといえる『ブライベート・ゲイ・ライフ』(学陽書房)を出している。同書には、彼自身の顔写真が掲載されているが、当時ゲイが顔写真を一般書籍に掲載すること自体、非常に勇気のいることであり、画期的なことであった。1992年には、大塚隆史他編の『別冊宝島 ゲイの贈り物』(宝島社)が出版される。そして、それらの出版をきっかけとするように、次々とゲイが一般誌などで取り上げられ、「ゲイブーム」と呼ばれる現象が起こり、ゲイ個々人の声や姿が一般メディアを通して発信されるようになった。

声だけでなく姿も

そして、このような流れの象徴ともいえる出来事の一つが、パレードであろう。1994年に日本で初めてのレズビアン・ゲイ・パレードが、南定四郎の手により東京で開催され、1996年には札幌でも「札

幌ミーティング」により実現された。東京のパレードは、第3回目に主催者とその運営方法に反対する人たちが対立し、パレード後の集会で紛糾、その後2000年まで事実上失われてしまったが、このようなパレードの始まりは、より多くのゲイが、声だけでなく積極的に姿を現していく時代の到来を表しているといえる。

やはり同じ1994年に発行されたゲイ雑誌『バディ』(テラ出版)は、その後、「フツー」のゲイの顔写真の掲載を行うということを積極的に進めたが、それも、「声だけでなく姿も」への転換を物語っている。ゲイ資本によつて発行された『バディ』と『G-man』(ジーププロジェクト)は、それまでのゲイ雑誌にはあまり見られなかったゲイ・ポジティブな情報とともに「一般の」ゲイの姿を掲載し続け、「コミュニティ意識の高揚に大きな影響を与え続けている」。

このように、声を書き記され、経験の共有が積み重ねられ、また、多くの「仲間」の姿を見ることによつて、「コミュニティ」意識が高揚していったと考えるのは、決して無理のある推測ではないはずだ。そして、これからさらに、この「コミュニティ」意識が裾野を広げていくことは間違いない。その中で、また新しくゲイの歴史に書き込まれる出来事が起こっていくことだろう。そして、日本のゲイの歴史が本格的に書かれるのも、まだまだこれからのことだ。

日本のゲイシーンがひと目でわかる

GAY HISTORY

年表作成●伏見憲明

1948「昭和23」年

●日本で最初のゲイバー「ブラウンズウィック」が銀座に開店（「夜曲」も同時期に開店）

1949「昭和24」年

●三島由紀夫、自伝的ゲイ小説『仮面の告白』発表

1950「昭和25」年

●「あまとりあ」創刊

1952「昭和27」年

●日本初のゲイ媒体「アドニス」創刊（62／昭和37）

1956「昭和31」年

●乱交旅館の草分け「竹の家旅館」が大阪・

西成で開業（正確な年月日は不明、もつと前かもしれない）

1957「昭和32」年

●丸山（美輪）明宏「メケメケ」がヒット、神武以来の美少年、またシスターボーイとして騒がれる

1959「昭和33」年

●売春防止法が施行され、新宿二丁目のゲイタウン化が進行

1969「昭和44」年

▼ニューヨークで「ストーンウォールの反乱」が起きる。以後、アメリカでゲイ・リベレーションが拡大

「仮面の告白」



「アドニス」



竹の家旅館

1971「昭和46年」

●丸山（美輪）明宏の自伝『紫の履歴書』がベストセラーに

●東郷健、参議院議員選挙に初出馬

●ゲイマガジンとして日本初の商業誌『薔薇族』が第二書房より創刊

▼「ストーンウォール」二周年の記念日に、ニューヨークで第1回ゲイ・プライド・パレードが開催

1977「昭和52年」

▼ハーヴェイ・ミルクがサンフランシスコ初の市政執行委員に就任

1978「昭和53年」

●おすぎとピーコ、TBSラジオ番組でレギュラーになり、有名芸能人に

●人気ラジオ番組「スネークマンショー」で、大塚隆史がゲイ・パソナリティとして「ウェンズデー・スペシャル」を担当し、ゲイリブのメッセージを全国に発信

1981「昭和56年」

▼「ニューヨーク・タイムズ」紙が、カボジ肉腫というめずらしい癌がゲイ男性の間で流行っていると報道。以降、エイズ問題が深刻化

1984「昭和59年」

●「GAY日本」創立（会長・中山晋平、事務局長・南定四郎）

1986「昭和61年」

●「動くゲイとレスビアンの会(OCCUR)」結成

1988「昭和63年」

●「GAY日本」内に「AIDSサポートグループ」がスタート

1989「平成元年」

●「GAY札幌ミーティング」発足

1991「平成3年」

▼女性誌「クレア」の特集「ゲイ・ルネッサン



「鳩よ！」



「CREA」



「薔薇族」



美輪明宏「紫の履歴書」

ス91」を皮切りに、一般誌でゲイをテーマにした特集・記事が組まれていく。91年だけでも「イマール」03「インパクション」[AERA]「MORE」等々で取り上げられ、94年頃までに各メディアを一巡する勢い

●日本初の大バコでのゲイナイト「Private Party」が芝浦・ゴールドで行われる

●「動くゲイとレスビアン」の会」が「府中青年の家事件」で東京都を提訴

●伏見憲明著『プライベート・ゲイ・ライフ』（学陽書房）が刊行されメディアで話題に

●「動くゲイとレスビアン」の会」の申し入れにより「同性愛」を異常性欲とした『広辞苑』の記述が改訂される

1992年 平成4年

●第1回東京国際レスビアン&ゲイ・フィルム&ビデオ・フェスティバル（動員は1000人）

●掛札悠子著『「レスビアン」である、ということ』（河出書房新社）刊行

●大塚隆史・伏見憲明・上田理生編『別冊宝島／ゲイの贈り物』（宝島社）刊行

1993年 平成5年

▼日本テレビ系「同窓会」放映。同性愛を初めてメインテーマに扱ったドラマとして話題になる。後への影響も多大だった（10月）

1994年 平成6年

●ゲイマガジン「パティ」がテラ出版より創刊
●第1回レスビアン・ゲイ・パレード（参加者が1000人を越す）

1995年 平成7年

●「動くゲイとレスビアン」の申し入れにより、日本精神神経学会が、同性愛を「性的逸脱」とは見なさない見解を表明

●「G-MEN」がジーププロジェクトより創刊

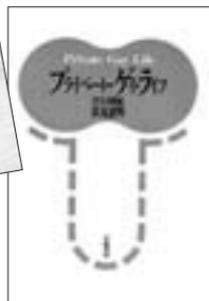
1996年 平成8年

●札幌で「第1回セクシユアル・マイノリティ・プライドマーチ」が開催される

●埼玉医科大学の倫理委員会が、「性転換手術」を正当な医療行為と位置づける答申を発表

●すこたん企画が中学校で講演（朝日新聞が報道）

掛札悠子
「「レスビアン」である、ということ」



「ゲイのおもちゃ箱」

伏見憲明
「プライベート・ゲイ・ライフ」

●人気サイト「MENS NET JAPAN」が開局

1997「平成9」年

●「動くゲイとレスビアンの会」と都によって争われていた「府中青年の家裁判」の二審判決で、原告側の全面勝利。都教委は上告せず判決が確定

1998「平成10」年

●「パティ」の企画「マチカドボーイフレズ」で初めて、読者がゲイ雑誌に堂々と顔を出す時代に

●「ぶれいす東京」主催のイベント「VOICE」が開催

2000「平成12」年

●大阪が、HIVの啓発イベント「SWITCH 2000」がMASHI大阪によって開催され、堂山の街がゲイたちで賑わう

●東京でパレードが復活、砂川秀樹実行委員長により「東京レスビアン&ゲイパレード 2000」が開催（2000人近くが参加）

●川口昭美実行委員長によって、新宿「丁目

初」のゲイのお祭り「レインボー祭」が開催

●東京都の人権推進の施策で「同性愛者」もその対象になる

2001「平成13」年

●「動くゲイとレスビアンの会」などの働きかけにより、法務大臣の諮問機関である「人権擁護推進審議会」の最終答申に、人権救済の対象として性的指向による差別が明記される

2002「平成14」年

●厚生労働省が「同性間性的接触におけるエイズ予防対策に関する検討会」を設置し、啓発活動に関ってきた当事者を委員に任命する

2003「平成15」年

●第7回レインボーマーチ 札幌に、上田文雄市長が参加

●性同一性障害の上川あやさんが世田谷区議に当選

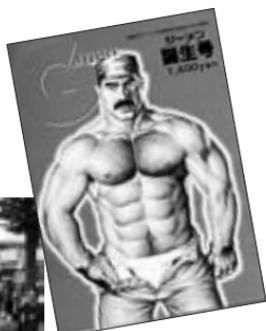
●「性同一性障害特例法」が成立。日本でも戸



レインボー祭り



東京レスビアン&ゲイパレード



「G-MEN」

籍の性別変更が可能になる

2004〔平成16〕年

- ソーシャル・ネットワーキングサイトMixiがゲイの間で大ブレイク

2005〔平成17〕年

- 東京レズビアン&ゲイパレードが復活
- 大阪府会議員の尾辻かな子さんがレズビアンであることをカミングアウト
- ハードゲイキャラのタレント、レイザーラモンEGがお茶の間で大ブレイク